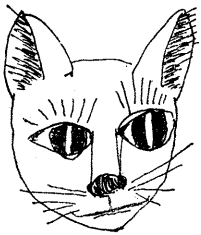
園長先生と猫

後藤　江村



四十年近くも教員生活をつづけて、そこの町の中学校長を最後に引退した照谷憲一は、その足でしばらく市立の幼稚園長をつとめることになった。純真な天使の群にかこまれて新しいよろこびを感じたせいか、急に若々しくなってきたと、元の同僚たちが噂した。

キンダーガルテンの創始と、その生長の沿革をもう一度勉強しなおさなければいけないと思いついた照谷は、熱心にフレーベルの伝記を読んだり、倉橋惣三の日本幼稚園史をノートしたりした。こどもの楽園に余生がささげられるなら教育者としてこんなうれしいことはないと思っていた。しかし、このたのしい生活は、たった一年でおしまいになったので照谷はそれがたいへんさびしかったが、このしごとのわすれがたみに、白い毛並がつやつやとして、ベルシャのかかった美しい眼のかわいい猫が一匹のこることになった。

照谷が幼稚園にかよいはじめて、まだ何ほどもたたなかったある日、事務室にとんできた尾西という若い教員が

「園長先生っ、ちょっと、いらして下さい」と、いうなりまたあわてて出て行った。

「え、なにかあったの」

照谷が、これもいそいであとから「ゆり組」の部屋へはいっていくと、こども達がピアノのまわりにかたまって、なにかわいわいさわいでいる。照谷は、できるだけのやさしい目顔で制しながら

「どうしたの——」

と、そっときいた。

「小猫がはいってきたんです。ピヤノのうしろにかくれています。」

「どれ、どれ」

照谷が、こども達の群を、しずかにかきわけながら、そっとのぞいて見ると、いる、いる。ピアノのうしろに、小さくなって、しゃがんでいる。尾西が片方の出口をふさいで、照谷がもう一方のすきまから手をつっこんで顔をしかめながら、やっとつかまえた。白い毛並のかわいい小猫だった。

「園長先生っ、ねこ抱かせて、ねい」
たちまち小さい手が、照谷をとりまいてしまった。
「あとで、ね、あとで抱かせてあげる。みんないい子、わかったね」
照谷は、毛糸チョッキのふところへ小猫をかくして、泳ぐようなかっこうで、やっとこども達からのがれて事務室へかえると用務員のおばさんが笑いながら立っていた。
「猫の子ですか、先生、ちよっと見せて」
「ほら、かわいいんだよ。」
照谷は、チョッキのふところから、小猫を出して、机の上にのせて見せた。たしかにペルシヤのかかっている白い美しい毛並で、かわいい眼をした、キンダーブックの絵によくあるそのままの小猫だ。机の上に、ちょこんとすわったきり、じつにおっとりとしている。ちっとも人をおそれるようすがない。
「きれいな顔をしていること」
用務員のおばさんが、背をなでてやると、眼を細くして、その顔をじっと見あげている。なんて、上品な、おとなしい小猫だろうと、照谷は、すっかり感心してしまった。
「おばさん、こいつきっと、近所のお宅の小猫だろうから、すまないけれど、そこらを聞きあわせてもらえまいか」
「こんなかわいいのですから、さがしているかも知れませんね」
おばさんは、もう二十年もここで暮しているので近所のようすは、よく知っていた。猫の好きな御隠居さんの家もすぐこの近くにあるし、それにこの小猫の毛並に似ている親猫も、そこらで見かけたことがあるような気がすると言って、出て行った。
照谷は、また小猫をふとふろに入たが、いまにまたこども達が押しかけてくると思ったので、いそいで机のひきだしを一つ片付けて、やわらかい紙くずで鳥の巣のようなものをこしらえると、その中へ小猫を入れて、ひきだしをかるくしめた。中はあたたかくて、気持がいいと見えて、うとうとしているらしいようすに、すっかり安心した照谷は、そこで書きかけの書類にせっせと筆をはしらせていた。
しばらくして、おばさんが帰ってきたが、どこにもそれらしいのがないと言うことであった。
「こんな、かわいい猫を、わざわざ幼稚園へ棄てにくる人もないでしょうにねい」
おばさんは、そう言って、机の上を眺めたが、小猫の姿がないので、椅子の下をのぞいたりした。照谷が黙ってひきだしの方を指してみせたら、こっくりをして笑った。
リズムあそびが終ったと見えて、さっきのこども達が、どやどやと入ってきた。
「園長先生っ、猫、抱かせて、猫、どこへやったの」
「う、うん、猫はね、お家がわかったの、お家へ帰ったんだよ」
「そう。猫のお家、どこだったの」

「あのね、ずっと向うの方、そこから迷児になってきたんだよ。」
「ほんとう、ね、ほんとうにそうなの」
「ほんと、ほんとだよ。」
こども達は、なかなかあきらめきれないようだったが、用務員のおばさんが、そのあとをうまく話してくれたので、やっと納得して出て行った。

その日は、午前中で、こども達が帰る日だったから、昼の食事は、みんなでにぎやかにいっしょだった。机の上に、ちょこんとのせてもらった小猫は、かわいい口を大きくあいて、あくびをした。サンドイッチのかけらを見せたら、眼をほそくしていかにもおいしそうに食べる。
「お魚の骨、食べるかしら」
主任教諭の井原が半紙の上にこまかく砕いた骨をのせてやると、これもすこし食べたようだったがパンのかけらの方が気にいったと見えて照谷の口もとの方を見上げている。照谷がパンのやわらかいところを小猫に与えているかっこうが、いかにもたのしそうだと言って若い教員たちがきゃっきゃっと笑った。
「園長先生と猫――ちょっとシックね」
文学好きの杉森が、ささやくような声で、そう言って、くすっと笑った。みんなでいっしょのひるげの時間は、いつもにぎやかだったが、こんなたのしいことはめずらしかった。

食事がすむと、小猫はまたもとのひきだしの中へ入れられてそこでおとなしく眠りつづけていた。時々ひきだしをあけて見るのだが、満足しきったように眠りこけているのでそっとしておいた。ひるすぎ用務員のおばさんが、もう一度そこらの心あたりを尋ねてまわったが小猫の飼主は見つからなかった。
退出の時間が近ずいたので、みんなが帰り仕度をはじめたが尾西は、小猫のことが気になると見えて、
「園長先生、猫ちゃん、どうなさいます。」
と聞いた。
「ふところにはいった窮鳥だものね、ともかく今夜一晩抱いて帰えるから明日にでもなれば飼主が見つかるかも知れないさ」
照谷は、小猫をチョッキのふところへ入れながら、紙くずの小鳥の巣をしらべて見たが、あたたかいぬく味がのこっているだけで、すこしも濡れていなかった。はやく連れて帰って、ゆっくり用を足さしてやりたいと思った照谷は、いつものように少しうつむきになって、静かな坂路を登って行くと、ふところの中で小猫が啼いた。チョッキの上から軽くおさえるようにして歩いていたら、中学校から帰ってくる女生徒たちが
「さようなら」
と、挨拶したが、にんまりと笑って
「あら、猫の子でしょ」
と、言った。

玄関で靴を脱ぎながら
「おみやげがあるんだよ。」
と呼ぶと、勝手の方から老妻のふみが顔を出したが、足もとへ甘えて行った小猫を見て
「あれっ、まあ、かわいい猫！」
と言いながら抱きあげた。
「迷児なんだよまだあずかりの小猫だから大切にしてお呉れ」
照谷が洋服をぬぎながら声をかけた時には小猫はもうふみの手の小皿から、呑みのこりの牛乳を、うまそうな音をたててなめていた。朝からまだ一度も用を足していなかったと思ったので庭の広い芝生へ連れて行ったが、あいにくそこに寝そべっていたベルに驚いたと見えて、いきなり沓脱石から廊下へとびあがって、そのまま座布団の上に丸くなってねてしまった。
ふみは小さいみかん箱に乾いた砂を入れて玄関の土間に置くと、眠っていた小猫を抱いて行って箱の中へいれてやった。小猫は乾いた砂に小さい顔をよせていたが、べつに用を足すのでもなく、ひょいと箱からとび出してきて、またもとの場所にうずくまった。
親猫を慕って啼くようなこともなくて、その夜は照谷の夜具の上にのったまま眠っていたが、あくる朝みかん箱の砂が濡れていて、かわいいほど小さい黒い色のかたまりが三つ四つ砂にまみれてころがっていた。
「は、はん。りっぱなしつけがしてあるな」
照谷も老妻も、すっかり感心してしまった。食事のときもまことに落着いている。与えられるものだけ、すなおにうまそうに食べるだけで、いやしい振舞がすこしもない。
「きっと、良いお宅の猫ですね探しているかも知れませんよ。」
ふみが、朝の食卓をかたつけながらそう言った。照谷も、今日もう一日飼主を探して見ようと思ったので、またふところに入れたまま出勤して行った。
いつもの朝のように、園庭でこども達に囲まれてはいけないと思ったから、逃げるようにして事務室に入ると、すばやくひきだしをあけて、紙くずの巣の中へ小猫をかくしてしまうと、はじめてほっとして、みんなと眼顔でほほえみあった。
「こども達が、まだ忘れていないんです。ピヤノのうしろをのぞいたりして——」
尾西が、そっとささやいた。
まだ、どこからも飼主が現れていないのでその日も用務員のおばさんは、仕事のあいまに、飼主をさがして見たが、やっぱりわからなかった。
「愛らしい小猫の迷児。幼稚園に保護してあります。お心当りの方はおいで下さいって広告出したら、おもしろいでしょうね。」
結婚の話がまとまりかけて、この頃うきうきしている石井という顔立の美しい教員が、こう言って照谷に笑いかけた。照谷

もつりこまれて笑ったが、どうか飼主が現れなければいいがという気持が頭の中をかすめていった。

軟禁されていた小猫は放課後になって、やっと机の上に出してもらうと、あくびといっしょに、せいのびをしてみせたが、ふいに光りもののような早さで園庭にかけおりた。そして花園の隅にしゃがみこんだ。花園とはしゃれたところをえらんだものだと、照谷があとをついていくと、ちらっと一気に裏門のそばまで走りぬけたが、ちょこんとすわって何か考えているらしい。いくら小さくても猫は猫だ。猫は鋭敏な動物だから、忘れた記憶を呼び起そうとしているのかも知れない。その時、四つ位の男の児が母親に手をひかれて歩いてきたが、小猫はちょろちょろとその足もとにじゃれついていった。

「ねこ、ねこ」

男の児が母親の手をひっぱって立ち止まった。

「かわいい猫ちゃんね。さ、さ、行きましょう。」

母親とこどもは、いくどもあとを振りかえりながら向うの角へ曲っていった。照谷は、いそいで小猫を抱きあげると事務室へ戻ってきて

「妙にこどもが好きらしい。この小猫が迷児になった経路がわかるような気がするよ。」

と、言った。

いつもより少し早目に帰り仕度をしている照谷のそばへ、若い教員たちが集まってきて小猫を抱きながら、きやっきやっとはしゃぎまわっていた。

「あんた、園長先生の猫ちゃんになるの、いいわね、しあわせだわ。」

玄関の格子をあけると、ふみがすぐ出てきた。そして照谷のふところが、ふんわりとふくれているのを見ると、にこりとした。小猫は昨日よりもたっぷり牛乳を——もしかするとまた戻ってくるかも知れないと思ってふみが呑まないで、そっくり残してあった——呑ませてもらって、元気に部屋中をかけずり廻った。廊下から芝生へおりたり、縁の下へもぐりこんだり、ベルの寝そべっているすぐそばまで近寄って見たり、すっかりここの飼猫になりきっているらしいようすに、照谷も老妻もほっとした。

夜は照谷の夜具の上に、そしてつつましやかに土間のみかん箱の砂の中で用を足す。こんな日がつづいて小猫は、ずんずん成長していった。障子や襖を破いたりする悪い癖をつけないように、木登りを教えてやると、小猫はたちまちその快感をおぼえて、外へ出るとすぐ庭の木の高い梢へよじのぼるようになった。木登りという快適なあそびへ誘導したことはたしかに一つの成功で、照谷はよくこれを自慢話にした。

小猫はタマというおよそ平凡な名がつけられた。名は平凡な

タマではあるが、白い毛並のつやつやとして、ベルシャのかかった眼の美しい、それになにより「しつけ」のりっぱな小猫はこどもならさしずめ優秀児のなかまにはいるのにちがいないがよく個性を観察すると、油断のできないことがたった一つあった。木登りの運動にあきると、生垣の根元にうずくまって、じっと道の方をねらっていて、小さいこどもの姿をみると、いきなりとび出して足もとにじゃれつきながらあとを追いかけて行く。よくよくこどもの好きな小猫と見える。べつにこれといって仕事のない老妻のふみがお伴についているからいいようなものの、うっかり眼を放すと、いつどこへ行ってしまうかわからないタマの性格の矯正には、手をやいてしまった。

首玉に小さい鈴をつけて見た。これが屋敷の中で鳴っている間は安心していられるが、垣根の外へ出た時はお伴のふみがのこのこ出て行かなくてはならないので、まったく世話のやけるタマだと、さすがのふみも愚痴を言った。近所にわるい犬が一匹いたけれども、ベルがかならず助太刀に出てきてくれるのでこの方はよかったが、それでも知らない間にかなり遠くの方へ迷って行って、魚屋の若い衆や牛乳屋のおばさんに抱いてきてもらったことがいくどもあった。

タマが元の飼主の――それはきっと良い家庭だったにちがいない――ところから、ふらふらと迷児になってやってきた経路が、手にとるようにわかる気がした。

しかし、もうしばらくの辛棒だ。つまり猫の幼児期が終るまでは養育者の細心な監護が大切だということになってくる。照谷は、タマの観察記録から、かなり貴重な教育の資料を発見して、それを同僚に話してきかせた。

「猫の保育日記というわけですね。」

とはじめは若い教員たちが、くすくす笑ったが、笑ってしまうことのできないことがあったので、これは冗談ではないということがよくわかった。

照谷が「お別れの会」をしてもらっておそく帰ってきた雨の夜、タマは四匹の赤ん坊を産んで母親になった。タマ安産のしらせを書いておくったら、四、五日して幼稚園の若い教員たちがそろってにぎやかに坂路を登ってきた。

「タマちゃんの出産お祝」と書いた花がつおの大きな袋を抱えた美しい若い人たちの肩の上へ、花の吹雪がようしゃなく降りそそぐ庭の芝生におり立って、照谷とその老妻が眼をしばたたきながら、やさしい心のこもった贈物を受けている時、どこからきたかタマが尾西の足もとに、からだをこすりつけて甘えていた。

（伊藤市岡区　瓶山七四七）